



お伽の国の社会人

尾辻克彦

PARCO出版

お伽おとぎの国くにの社会人しゃかいじん

著者―尾辻克彦

発行日―一九八一年六月十五日

発行人―増田通二

発行所―株式会社PARCO出版

住所―東京都渋谷区宇田川町十五―

電話―〇三―四六四―二三〇五

振替―三一五五三五

印刷・製本所―大日本印刷株式会社

定価―一〇〇円

©Katsuhiko Otsuji 1981

©PARCO 1981

目次

湯舟の光	7
ウォーターハンマー	19
夜の森林	33
イルカとライオン	45
黒い山	57
オーロラ村	67
水に棲む	81
留守番電話	91

ダンボルコッコ	103
孤独型UFO	117
一万二千円の生活	131
銀色の家	143
朝のコスモス	155
花子のドル平	169
病気の関係	183
あとがき	195

装画…赤瀬川原平
装丁…菊地信義

お伽の国の社会人

湯舟の光



むかしむかし、あるところに、神様と仏様が住んでいました。朝起きると、神様は山へ柴刈りに、仏様は川へ洗濯に……。

物語はここからはじまるわけですが、しかし神様にも労働はあるのでしょうか。この問題に關してはこの物語にはいる前に、読者の皆さんとジックリ検討してみたい。神様というのは果たしてお金を持っているのかどうか。

神様の労働ということの前に私が考えたのは、やはりUFOのことです。UFOという乗物の中にも、果たして経済はあるのだろうか。

UFOが地球上の人類の共同幻想であるというのであれば、その中には経済なんてないでしょう。だけどそうではない一部のUFOが、地球と対等の物体、地球外文化人の宇宙船だとしたら、その船内にも経済というものが充滿しているのでしょうか。どうでしょうか。私はじつはあのUFOのピンボケ宇宙船の中というのは、経済の真空状態になっているのではないかと、そう考えてしまうのです。

アポロやその他のロケットは、地球の経済力を噴射しながら月や火星まで飛んでいます。だけど経済力で飛べるのはせいぜいその範囲ではないでしょうか。そういう地球の範囲からはるかに超えて遠く外に飛ぶことのできるのは、経済力を超えた力に違いない。経済力を超えて、そのエネルギーに原価計算を必要としないような底無しの力。

UFOのエネルギーというのは、そういう経済的にピンボケのエネルギーだと思ふのです。無限のエネルギー、もしくはそれに近いエネルギーを獲得すると、そこからは経済というものが蒸発してしまいます。経済が蒸発するということは、そこにあった悩みや争いの大半がいっしょに蒸発してしまうことにもなるのです。だから経済の真空状態をバックしているはずあのピンボケUFOというのが、この経済の充滿している地球上の人類から神として崇められ

てしまうことは、当然といえば当然のなりゆきなのかもしれません。

そこでこんどは神様の問題です。神様の労働問題。これを読者の皆さんとジックリ検討しようというわけですが、その前にもうちょっとこの物語の方をのぞいてみましょう。

むかしむかし、あるところに……、ここはもうのぞきましたね。神様と仏様が住んでいたのです。二人の間には子供がなかった。だけど何なく幸せに暮していました。お伽話というのはだいたいそうですね。幸せな老夫婦なのに、何故か子供だけがないのです。

神様というのはじつに神々しい人でした。あまりにも神々しいので柴刈りを終った神様が帰り道の角を曲ったところで、もう仏様には、

「あ、神様のお帰りだな」

とわかってしまうのです。だからたとえトイレにはいった神様が水を流すのを忘れて出てきたりすると、トイレの中はもう神々しさが充満してしまいます。そこへ仏様がはいったりしようものなら、

「うわア、たまらん。もう神々しいったらありやしない。嫌ねエあなた、終ったあとにはちゃんと流しといて下さいよ」

「いやごめん、ごめん。いまちょっと人生のことを考えたりしていたもんだから。しかし人生なんてほとんど実体のないものだと思っていたけれど、やっぱりあるんだってねえ。本当は大変なものらしいね」

「あなた、聞いているんですか。人生もいいでしょうけど、これ置いとくと抜けないんですよ。神々しいのがしみついていますよ、本当にもう。まったく」

仏様はブツブツいいながらトイレの小窓を開けて、掌をバタバタとうちわのように振りながら空気を入れ換えている。神々しい空気を窓から払い出しているのです。

「あれ、いまは小の方がちょっと出ただけなんだけど、そんなに神々しかった？」

「ちょっとだって何だって、あなたは神様なんですよ。そのところをよく考えてやってもらわないと、またトイレの中を塗り変えたりするの大変なんですから」

外から見ていると、トイレの小窓からは神々しい空気がどんどん流れ出て行きます。あんまりどんどん流れ出て行くので、見る方は心配になってきます。あんなにどんどん神々しさが出て行ってしまったら、神様というのはもう神様じゃなくなっちゃうのじゃないかしら。反対に世の中の方がどんどん神々しくなっちゃって、神様なんてどこにいるのかわからなくなってしまうのじゃないかしら。

しかしこの神様とエントロビーの問題についてはもう少し成りゆきを見ることにしておいて、また物語をのぞいてみましょう。

「また生まれたのよ。赤ちゃんが」

神様は仏様の言葉に気付かず、まだトイレのつづきを考えています。

「……いやアしかし人生というのはやはり実在するんだなア。今日柴刈りの休み時間にね、山の上から目撃したんだよ。人生が実体としてモロにあるなんて、ちょっと想像もつかない……」

「あなた。神様。聞いているんですか。また生まれたのよ。赤ちゃんが」

「え。また生まれたの？」

「そうなのよ。今日洗濯から帰ったらまた生まれちゃった。今日は男の子」

「いや、驚いたなア、きのうも生まれて、おとといも生まれて、このところずーっと毎日じゃないの。まったく」

いやしかし神様も驚いたようだけど、私も驚きました。作者が驚いたので読者の皆さんも驚いたかもしれません。二人の間には子供がいないと、さっき書いたばかりなのに、きのうも今日

も生まれたなんて。これはひょっとしたらふざけた文章なのでしようか。

しかしこれはよく冷静に考えてみたら、別に矛盾していることではないというのに気がつきます。それはどうしてなのか。この問題をちよつとゆっくり考えてみましょう。

二人の間には子供がない。しかし毎日のように子供が生まれている。これは一見矛盾しているように思われますね。毎日子供が生まれたら、一年で三六五人の子持ちになるではないかと。それを二人の間には子供がなかった、だけど何不自由なく幸せに……、なんて書くのは矛盾しているじゃないかと。

それはそうです。しかしこれが矛盾しないケースも考えられる。つまり「二人の間には子供がない」そして「だけど毎日のように子供が生まれる」この二つの条件を満たすためには、その毎日のように生まれる子供が毎日のようにいなくなればいいのです。そうすればこの二つの事柄は矛盾しない。そうではないですか。

毎日のように生まれる子供が生まれ出るはしから家出して行ってしまうのです。そうすれば、二人の間には子供がなかった、しかし何不自由なく幸せに……、というふうに矛盾なく書けるじゃないですか。

しかし生まれたばかりの赤ちゃんがそのままつぎと家出してしまふということには少し無理があるかもしれません。いや大分無理があるかもしれません。その場合は手法を少し変えればいいのです。生まれた子供がいなくなるというのは家出だけではありません。毎日生まれてくる赤ちゃんを、神様と仏様が毎日捨ててくればいいのです。いやこのいいかたが不穏当だというのなら、毎日生まれてくる赤ちゃんを、つぎつぎに養子に出してしまえばいいのです。

まあ、もう少し物語をのぞいてみましょう。

「いやア、以前はぜんぜん気がつかなかったんだけど、仏様は本当は多産系だったんだね

エ」

「いやですよ。そんなふうにいわないで下さいよ。私の体のことなんか……」

仏様はちよつと恥ずかしそうです。台所で大根オロシをおろしながら、なかなか神様の方を振り向きません。神様は茶の間の火鉢の前に坐つて海苔をあぶる役をしながら、もう晩酌を少しはじめています。顔がほんのりと赤くなつて、一段と神々しくなつていくようです。茶の間に神々しさが充滿し、台所の方にまで流れて行きます。

「仏様もちよつと、大根オロシやりながらでもいいから、ちよつとやらない？ 一杯」

「いいですよ。これ、もうじきできますから」

神様は海苔をあぶりながら、端をチビツとつまみ食ひしたりしています。

「そうか。また今日も生まれたか。しかしいつたい何のつもりなのかねエ。その、生まれてくるといふのは……。ねエ、どう思う？」

「私は知りませんよ。そんな、赤ちゃんの内面までは」

「うーん、何か楽しいことでもあるのかな。生まれてくるといふのは、これは何か期待があるんだろねエ、きつと」

仏様が大根オロシを持つて来ました。おつゆももうできています。あとは鮎の塩焼きです。淡い煙が躍るように窓から外に出て行きます。これはいい匂いだけど、別に神々しくはありません。

「それでその、仏様。今日生まれた赤ちゃんというのは、どこにいるの？」

「あの、お風呂場で泳いでますよ。さっきお湯をわかしといたから」

神様はあぶつた海苔を皿の上で四角く千切ると、両手をはたきながらお風呂場の方へ行つてみました。台所では仏様が鮎の塩焼きをひっくり返しています。神様はその背中を見ながら、

お風呂場の戸をカラカラと開けました。お風呂場には蒸気が真っ白にこもっています。湯舟の方でビチャビチャと小さな音がしています。チュルル、と水の中をくぐるような音も聞こえます。チョピン、と水が跳ねる音も聞こえます。だげど湯気ではつきりは見えません。こんもりと白い湯気の中のある一箇所で、ときどきビカッと光が走ります。湯舟の水面が小さく揺れているでしょう。その揺れる光が、ときどき右に走ったり、左に走ったりしています。

(いったいどういふものかなア……)

神様は湯気の中にそうつとはいって行きました。だげど一歩はいったとたんに、濡れた石床がツルツと滑り、

「あつ、うわ、うわ……」

神様は両手をクルクル回して転びそうになってしまいました。

「どうしました？ 神様……」

台所の方から仏様の声がします。

「いや、ちょっと。何でもないよ。床が、濡れちゃって……」

お風呂場の床が濡れているのは当り前です。そんな当り前のことをいつたりして、本当は神様も何かちょっと恥ずかしいところがあるのでしょうか。あとはもうしゃべりません。天井から落ちる水滴が、湯舟にボタン、と跳ねました。チュルツ、とまた揺れる光が走ります。赤ちゃんがびっくりしたのでしょいか。

(よく見えないけど、メダカみたいだなア)

神様が人差し指を入れてみると、ちょうどいい湯かげんです。

「神様も、ご飯の前にはいっちゃったら？」

まるで湯気の中の神様を見ていたみたいに、台所の方から仏様の声が聞こえてきます。神様